〔調査概報〕

千葉市加曽利町　新山古墳群発掘調査概報

後　藤　和　民

I　遺跡の立地

1. 遺跡の位置

この古墳群は、千葉市加曽利町字新山683番地に所在する。千葉市域のほぼ中央部を東西に流れる都川の下流に近い北岸の台地上にある。この台地は、市の北方から広々と続く下総台地が都川によって区切られたその南端部に当り、その都川本谷から北上する加曽利支谷と古山支谷とによって刻まれて、一つの広大な舌状台地をなしている。この古墳群は、その西南端で、加曽利支谷が都川本谷に流入する河口部の東岸に当り、都川によって開析された広大な河成段丘上の水田平野を、直接眼下に眺望する台地先端部に位置している。

台地上の標高は約28m、水田面との比高は約18mをはかる。その台地の縁辺には、都川の北岸に沿って新東金街道（国道126号線）が走り、その国道と台地との間の狭隘な麓部には、新山集落の家並が「街村」状に展開している。

2. 周辺の遺跡

この新山古墳群の存在は、明治年間に、すでに知られていた。その当該地の所有者の1人である加曽利町字番場615番地の田野家で、明治末年に、当時竹林であったところを開墾中、数枚の板状の巨石を発見したという。この話は、当主の田野敏夫氏が祖父や父親から直接聞いており、氏の記憶にあるかぎり、すでにその巨石の数枚が自宅の庭石になっていたという。（註1）

しかし、それが古墳の主体部である組合式箱形石棺の蓋石であり、その古墳のほかにさらに2基の前方後円墳があって、その一帯が古墳群をなす墓域であることが認識されたのは、比較的最近のことである。昭和28年に、武田宗久氏が「新山古墳群」として紹介（註2）するまでは、その明確な記録はどこにも見当らない。

なお現在、新山古墳群の周辺において確認されている古墳（群）は第1図に示すとうりである。このうち、辺田前古墳については、「昭和2年に同町市原伝之助氏に依り発掘され組合式石棺内に太刀其他があったと伝える。今この石棺は取壊されて、その大部分が高伝寺境内に散乱しているが、其等を復元すると相当大きなものである」と武田宗久氏が記している（註2）。

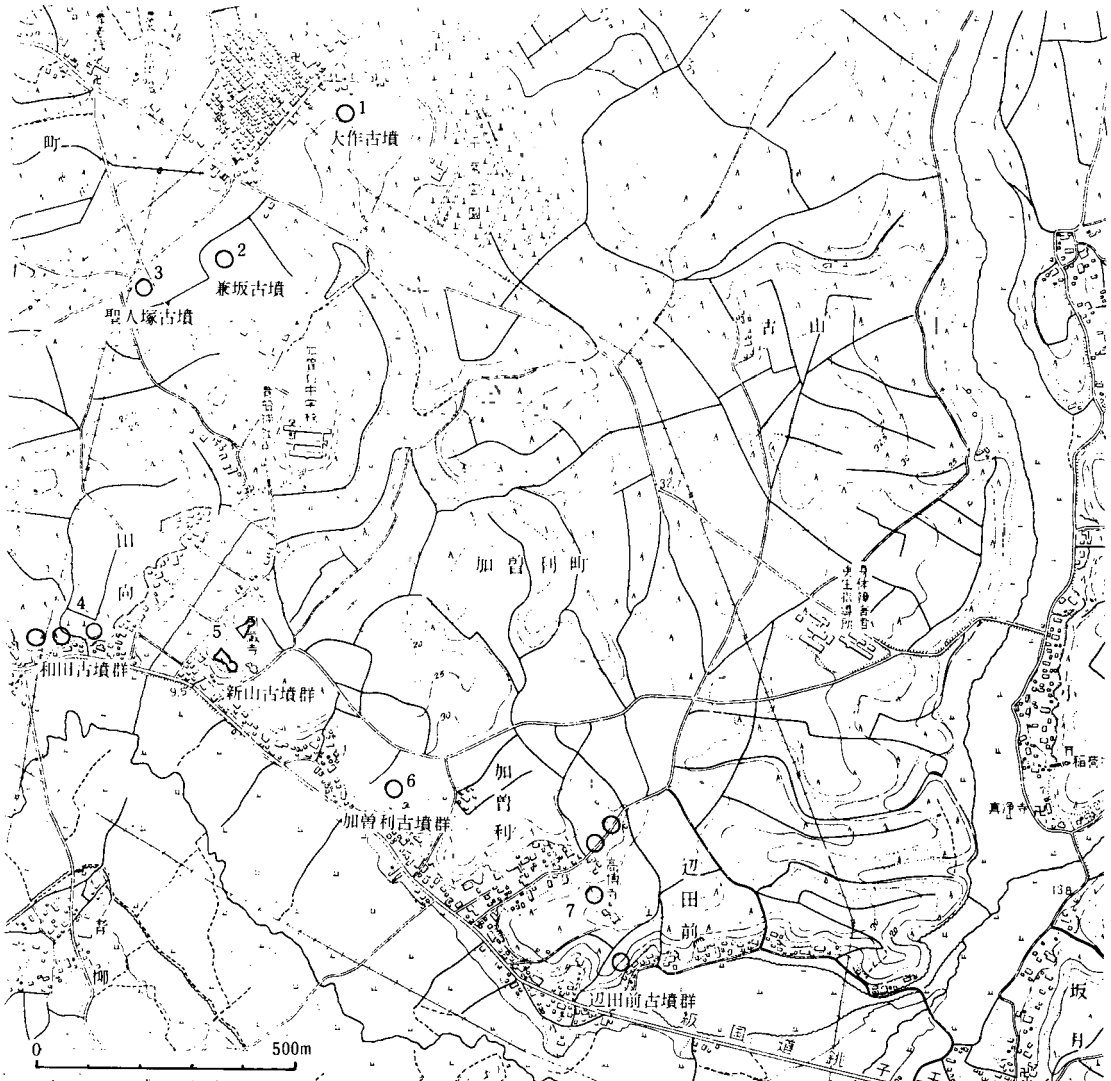
このように、加曽利町周辺においては、先に報告した兼坂古墳の例と、それにもう1基、同町字台畑の神社所有竹林中に露出している例を加えると、組合式箱形石棺を伴う古墳がすでに4基を数えることになる。これは、千葉市内全体においてわずか5～6例しか発見されていない現状からみて、比較的密集しており興味深いものがある。

また、前方後円墳については、現在市内で確認されているのは、新山古墳群中の2基のほかに、次に掲げる12ヶ所・15基を数えるにすぎない。

鉄砲塚古墳群	幕張町2丁目字鉄砲塚	（内1基）
鷹ノ台古墳群	横戸町字成が沢	（内1基）
鷲塚古墳	登戸町字鷲塚明徳高校校庭	
中原古墳群	平山町字中原	（内3基）
塚原古墳群	平山町字塚原	（内2基）
北谷津古墳群	北谷津町字上ノ台	（内1基）
仁戸名古墳群	仁戸名町	（内1基）
狐塚古墳	今井町字番匠免	
八人塚古墳群	南生実町字上新谷	（内1基）
椎名崎古墳群	椎名崎町字道作	（内1基）
人形塚古墳	椎名崎町字道初谷	
舟塚古墳	土気町字舟塚	

これらのうち、本格的な発掘調査がおこなわれたのは、3ヶ所・5基にすぎないが、その概略を述べておきたい。

中原古墳群　昭和34年12月から35年2月にかけて、袖ケ浦カントリークラブ敷地造成のため、早稲田大学考古学研究室が事前調査。9基のうち第3号から第5号までの3基だけが前方後円墳。



第1図　新山古墳群とその周辺遺跡

1. 大作古墳	桜木町字大作(市営霊園裏)	円墳1基(所在不明・湮滅)
2. 兼坂古墳	加曽利町字兼坂	円墳1基(昭和41年発掘)
3. 聖人塚古墳	桜木町字上人塚	円墳1基(埴輪が出土したという)
4. 和田古墳群	加曽利町字和田・田向	円墳3基(ほかに小型塚)
5. 新山古墳群	加曽利町字新山	前方後円2基、円墳1基
6. 姫宮古墳群	加曽利町字姫宮	円墳数基(加曽利古墳群と呼ばれていた)
7. 辺田前古墳群	加曽利町字辺田前	円墳3基(昭和2年発掘・太刀その他出土)

第3号墳は主軸32m、後円部の直径20m、高さ3.2m、前方部の巾19m、竪穴式土壙中の木棺直葬で、耳環5個、小玉120個、直刀2振が副葬されていた。第4号墳は主軸35m、後円部の直径18m、高さ約3m、前方部の巾15m、竪穴式石室内に截石を積上げた石棺。その中に直刀2振、刀子2口、鉄鏃20本、鉄鎌1丁が副葬されていた。そして、第5号墳は主軸28m、後円部の直径18m、高さ2m、前方部の巾は7m、竪穴式土壙中の木棺直葬で、直刀1振、刀子1口、鉄鏃31本が副葬されていた。これら3基は、その墳形および副葬品から、いずれも後期古墳とされている(註3)。

狐塚古墳　昭和39年10月、土取工事で湮滅寸前のところを武田宗久氏が緊急調査。しかし、後円部の一部を残して、すでに大半の墳形を失っており、主体部も完全に攪乱されていたため、結局、その形態、規模、所属時期は不明であった（註4）。

舟塚古墳　昭和39年8月、千葉県農業研修所の校舎拡張工事のため、早稲田大学考古学研究室が緊急調査。この古墳は、主軸37m、後円部の直径19m、高さ3.6m、前方部の巾20.5m、高さ3.9mで、前後2室からなる複式構造の横穴式石室を伴っていた。棺内は、すでに盗掘に遭い副葬品を失っていたが、主体部羨門付近より、小型有蓋壺、高杯、手捏ね壺、瓶などの祭祀用須恵器群が一括出土。これは曲型的な後期古墳であった（註5）。

その他、人形塚古墳から、明治年間に、地元の勝浦鞆雄氏が武人埴輪の一部を発掘して、それを東京国立博物館に寄贈している（註6）。（第1図）

II　発掘の動機と調査体制

1.　発掘の動機

昭和41年11月、加曽利貝塚博物館が開館した直後に、田野敏夫氏から、同氏の所有する加曽利町683番地の台地（畑）の南側縁辺が、自然崩壊にまかせられ、その台地縁辺の断崖直下に密集している民家に被害が続出している。このまま放置できないので、早急に削平工事をしたいが、この台地上に古墳群があるとのことなので、現地を調査して、直ちに何らかの対策を講じてほしいとの強い要請があった。

千葉市教育委員会では、早速同年12月15日に千葉市文化財保護審議会を開き、委員に諮問した。その席上、この古墳群は中期から後期（A.D.6～7世紀）に属し、前方後円墳2基と円墳1基を伴っているが、明治年間に一部が破壊され、すでに主体部の石棺および直刀などが発見されている。千葉市内では、都川流域における古墳群団の一環の中で、前方後円墳を有するものとしてきわめて重要な位置を占めている。当時の支配層の性格やその領域を究明する上では不可欠な存在価値を有しているとの、武田宗久委員からの強調があった。そして審議の結果、すでにその過半の墳丘を失っている以上、この際、残っている部分を精査して、できるだけ原形を復元し、向後の研究に活用しうるような記録を残すべきであるとの合意に達した。

2.　調査体制

教育委員会では、当初この調査の担当を武田宗久委員に依頼する方針であった。しかし、土地所有者の田野敏夫氏より、崖下の住民の安全のため来年度まで待てないとの強硬な申し入れがあり、それに対して、年度末における計画外事業として、十分な臨時調査費をねん出することは困難である。しかも武田委員は千葉県立高校における受験、卒業、新入学等に係わる業務の繁忙のため、学期末に調査を担当することは不可能であるという。これらの事情は、各大学の考古学研究室においても同様で、調査員となる考古学専攻の学生を招集することも困難な時期である。

そこで止むなく、加曽利貝塚博物館が中心になって、この緊急調査を実施することになった。その調査員および調査期間は次の通りである。

調査主体　千葉市教育委員会
調査担当部局　社会教育課
調査主任　加曽利貝塚博物館学芸員・後藤和民
調査員　明治大学考古学専攻生・平田美智子・庄司克・小池公子・小沢利夫・船木義勝・辻林浩、立正大学考古学専攻生・増田修・米田耕之助・坂田正一
調査期間　開始　昭和42年3月　1日
　　終了　昭和42年4月30日

III　調査の概要

1.　地形測量調査

発掘調査に先立って、本古墳群を載せている台地先端部における現地形の測量調査をおこなった。縮尺200分の1の平板測量により、台地平担部はコンター（等高線）0.5mで、墳頂部においては25cmで測定した。その他測量対象外の周辺部については、綿密な踏査をおこなった。その結果による現状把握を簡単に述べておく。

この古墳群を載せている台地の南側先端部は、新山集落のたび重なる宅地拡張のため、すでに旧地形を失っている。従来の台地縁辺に沿っていたと思われる東金街道の旧道（現在は集落内の小路）の位置からみて、少なくとも20mほど削り取られた可能性がある。しかも、その断面は防壁がない

ため自然崩壊が甚だしく、基盤の下部に堆積している成田砂層から上層に向って序々に崩れてゆくため、樹木等の繁茂する表土層がオーバーハングして空中に突出し、今にも崩れ落ちそうである。

第1号墳は、その崩壊しつつある崖端にあり、すでにその過半を失っているが、その残存部の形状をみると、全長約30m、その主軸をほぼ南東一北西に向け、墳頂の高さ（麓部との比高）約2.5mを測り、その両端は撥状に広がっているので、明らかに前方後円（方）墳である。ただ、現存の形状はきわめて不整形で、前方部と後円（方）部との比高も、その間の凹部も認められず、墳頂部は平担にならされている。その墳裾の線もかなり乱れているので、決して旧態のままとは考えられず、従って、いずれが前方部か後円（方）部かは、にわかには判定できない。

また、この台地の西側面は、もともと加曽利支谷に向って急峻な傾斜面をなすが、近年、その南端に近い部分が土砂の採集のために一部削られている。その崩壊部に近い台地上平担部に、第2号墳が位置する。この第2号墳は、その北東の末端部が農道のために一部削られ、中央くびれ部の東側面に大きな崩壊の跡があるほかは比較的よく保存されている。その残存部の形態をみても、これは長軸を南西一北東に向け、全長20m以上、後円部の直径14～15m、前方部の巾5～6m、前方部より後円部の方が1.5～2mほど高い、典型的な前方後円墳であることがわかる。ただ、表面的観察だけによると、後円部の形状は、墳頂部が隅丸方形を呈し、西側の墳裾の線が直線的であるので、あるいは後方墳の可能性も考えられる。しかし、後世の変形の痕跡もあるので、にわかには判定しがたい。

第1号墳と第2号墳との間は、顕著な地表の盛り上りもなく、ほとんど平担面をなすが、第1号墳の北西端の墳裾部に接した部分が、比較的小高くなり、その周辺の地表に乱脈な凹凸がみられた。しかも、田野氏の指摘によれば、かつて組合式箱形石棺が掘り出されたのは、この地点であったと伝えられているという。それを根拠として、この不整形な高まりを、一応第3号墳と名付けることにしたのである（第2図）。

なお、これらの古墳群が立地する台地の東側においては、円蔵寺の境内造成のため、かなり広範囲に削平されている。この境内の西側縁辺には、一段高く、巾5～6mの帯状に連らなる平担地があったという。その断片的な残存部をみると、かつて中世城郭に伴う「腰曲輪」状のものが構築されていた可能性もある。この円蔵寺の境内やその東側の坂道などの状態からみても、従来この位置に、自然の浅い谷頭が入っていたものと思われる。

また、この「腰曲輪」と第1号墳との間には、約15m×15mの範囲にわたって土砂が削り取られた凹部がある。表面の形状は不整形ながら、その底面は平担で堅く踏み固められている。その開口部には種イモ保存用の「イモ穴」などが掘られているので、農作業の必要で人為的に削平されたものと思われる。その穿さくされた断面からみて、これがごく最近のものであることは明らかである。

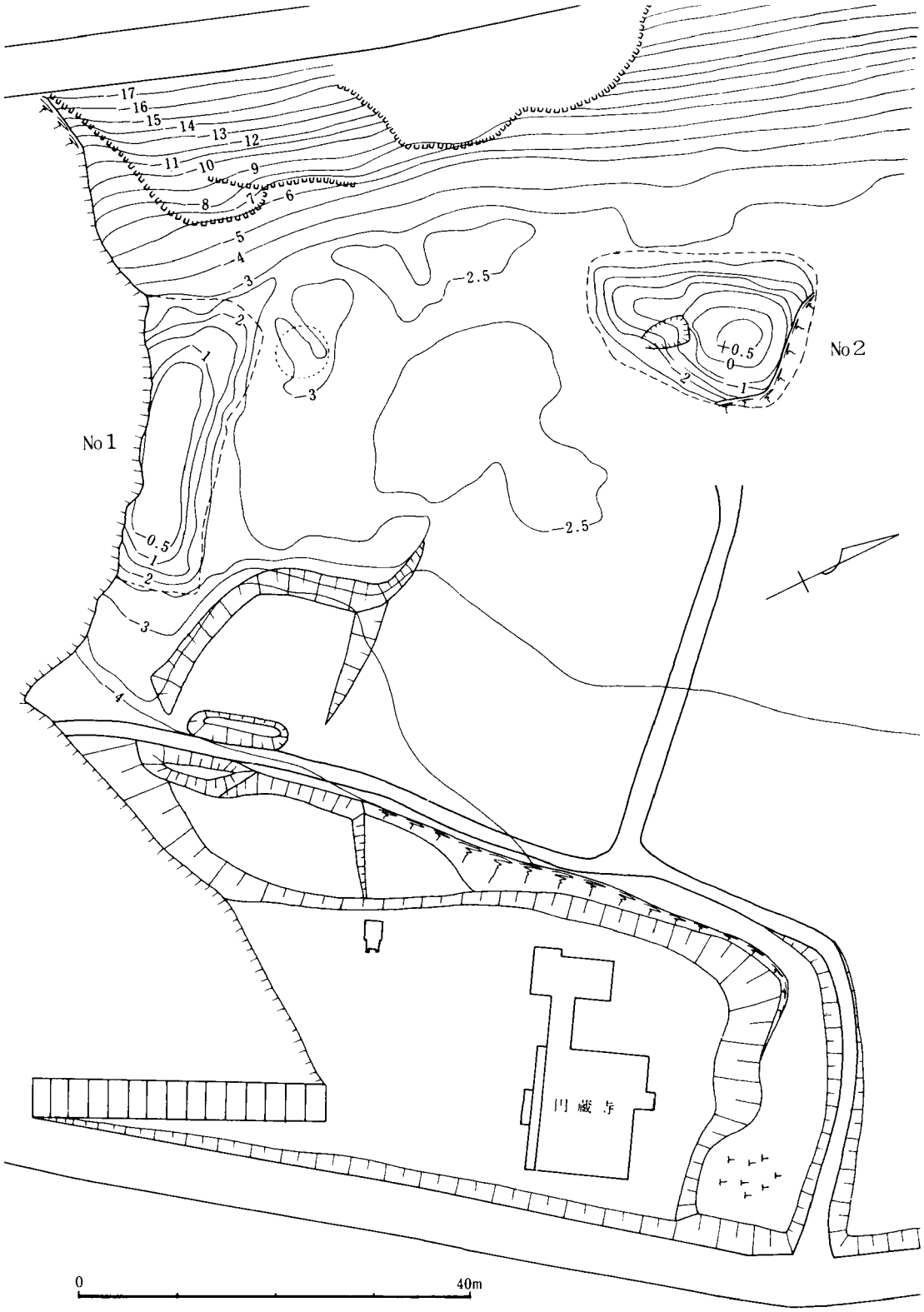
その他この台地上の北側平担部に、縄文中期の阿玉台式や加曽利E式の土器片がかなり濃密に散布しているほかは、遺構らしきものは認められなかった。

2. 発掘調査の方法

まず、調査期間、調査費および調査体制などの制約から、この台地全面における平面的発掘は断念せざるをえない。そこで、可能なかぎりのトレンチを設定し、その断面的調査をおこなうことにした。それでさえ、第1号墳においては、墳丘自体すでにオーバーハングした崖頂にあるので、その崖縁に対して平行するトレンチを掘り込むことは、極力避けなければならないのである。

第1号墳においては、墳丘のほぼ主軸と思われる中心線に沿って、その南半がすでに崩壊している。それに対して直交する方向（南西一北東）において、巾1m、長さ10.5～16.5mのトレンチを6本（Ⅰ～Ⅵ）、相互間に2mづつの間隔をおいて設置した。これらのトレンチによって、おもに古墳の北側面における墳丘築成の構造やその周溝の形態や主体部の位置などを確かめる。

また、長軸の方向には、基盤において比較的安全と思われる墳裾部において、その東端に巾1m長さ7m、西端に巾1m、長さ4mのトレンチを設け、これをⅦトレンチとした。このⅦトレンチの北壁断面と、Ⅰ～Ⅵトレンチの各南壁断面とを連結させると、それは断続的ではあるが、墳丘の長軸方向の断面的観察ができるわけである（第3



第２図　新山古墳群の周辺地形図

図）。なお、これらのトレンチによって主体部が発見された場合は、その時点から、その部分の平面発掘に切り替える。しかし、発見されなかった場合は、墳頂部において可能なかぎりのトレンチを設定して、あくまでも追跡調査をおこなう。

第2号墳については、長軸に対して直交し、しかも後円部の中心部を横断する位置に、巾1m、長さ20mのⅠトレンチを、前方部の最高地点を横断する位置に、巾1m、長さ20mのⅡトレンチを設定した。そして、主軸に沿った墳丘中央部にはⅠ・Ⅱの各トレンチの間を結ぶように断続させながら、巾1m、長さ20mのⅢトレンチを設けた。さらに、この古墳の周溝の形態を確認するため、墳裾部に巾1m、長さ2.5～5.5mのⅣ～Ⅵの4本のトレンチを掘り込んだ。それでも主体部が発見されない場合は、後円部の墳頂において平面発掘をおこない、徹底的に追跡する（第7図）。

第3号墳については、すでに主体部が掘り上げられたということなので、今回の調査では、その痕跡と周溝を確認することを主眼とした。そこで、まず石棺の底石などの残留物を探索するため、その部分のボーリング調査をおこない、併せて、周溝確認のためのトレンチを設定することにした。

その他、これらの墳丘を築成するときの土砂をどのように確保したか、周辺部の旧地表面と墳丘との関係はどうであったか、それに、このように狭隘な範囲に3基の古墳が接近している以上は、その周辺の空白部において、果してこれ以外の古墳が存在しなかったか否かなどの問題を検討するため、時間の許すかぎりにおいて、古墳隣接部のトレンチ調査をおこなうことを目標とした。

3. 第1号墳の調査

(1) 墳丘の築成（第4図）

まず、墳丘の北側面において、主軸と直交して南西－北東方向に設置されたトレンチによれば、この台地の地山基盤は第10・11層の関東ローム層で、ほぼ平担地形であったことを示している。その上に載っている第5層～第9層は、いずれも土質が均一で堅くしまっており、しかもローム基盤とほぼ平行しているので、これらが自然堆積であることを物語っている。ところが、第5層より上層になると、それぞれの土質が不均一で、各種の土質がブロック状に混入しており、その堆積も乱脈である。しかも土質のしまりも悪いので、人為的な積み上げであることは明らかである。

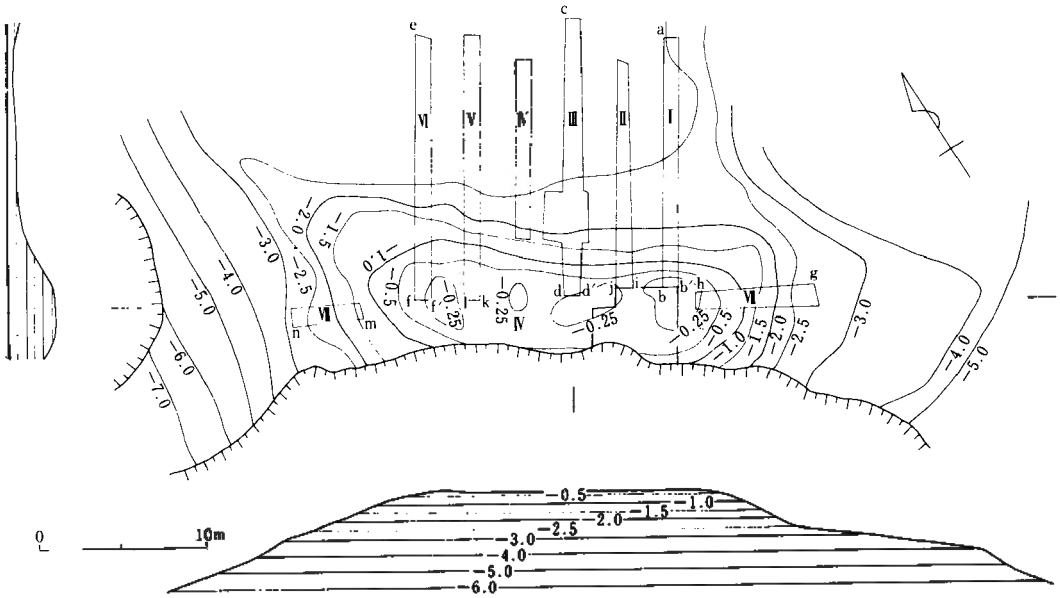
墳丘の中腹部に帯状に堆積しているこの第5層黒色土層こそは、この古墳を構築した当時の地表面であり、それより上に載っている土層がすべて墳丘のための盛土である。すなわち、現表土の第1層攪乱層をはじめ、第2層褐色土層（厚さ30～60cm）、第3層黄褐色土層（70～150cm）、第4層黒褐色土層（30～40cm）などは、場所によってその色調を異にしているが、比較的厚さも厚く、大量の土砂を一度に積み上げたことを示している。しかも各層におけるブロック状混入物をみると、自然堆積の各種の層が不均等に混合されており、その土砂の採集地点は単一の土層ではなかったことを物語っている（第6図）。

次に、墳丘の主軸方向に設定されたトレンチによると、やはり当時の旧表土（第5層黒色土層）まではローム基盤と平行してほぼ水平である。それより上層における盛土は、場所によってその色調も層数も厚さも異なっているが、これらの乱脈な土層も概観的にみれば、全体が水平になるようにならされながら積み上げられたことがわかる。ただ、墳丘の両端部においては、墳縁の傾斜に合わせて斜行し、多少複雑な互層をなしている。これは墳丘末端の崩壊を示すものであろう（第6図）。

(2) 墳裾および周溝

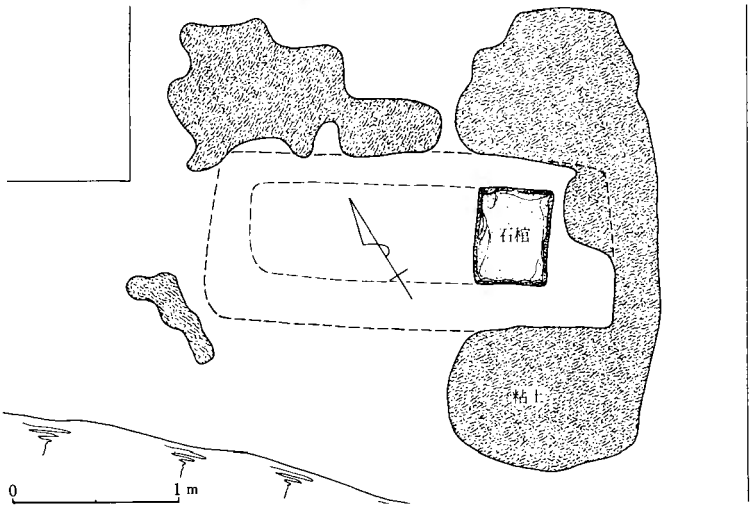
Ⅰ～ⅥおよびⅦトレンチの断面図でも明らかなように、第1号墳の墳裾部においては、いずれも旧地表面からローム層上面まで削り取られている。すなわち、墳丘の盛土が積み上げられたのち、その末端部から外側に向って、ゆるやかな傾斜を残しながら削られ、墳裾部が拡大されている。

しかも、その削り出された墳裾部を平均して約3～4mほど残した。さらにその外側において、ローム基盤を50～90cmほど掘り込んでいる。それも、底部がほぼ水平になるように、巾7～15mにわたって均等に削り取られている。これは周溝とは考えられず、むしろ、墳丘自体の土砂の組成からも明らかなように、周辺の旧地表からローム基盤までを掘り、それをかき集めて積み上げたことを示している。すなわち、この墳丘はいわゆる「掻き上げ古墳」であり、もともと周溝は伴っていなかったものと判断されるのである。



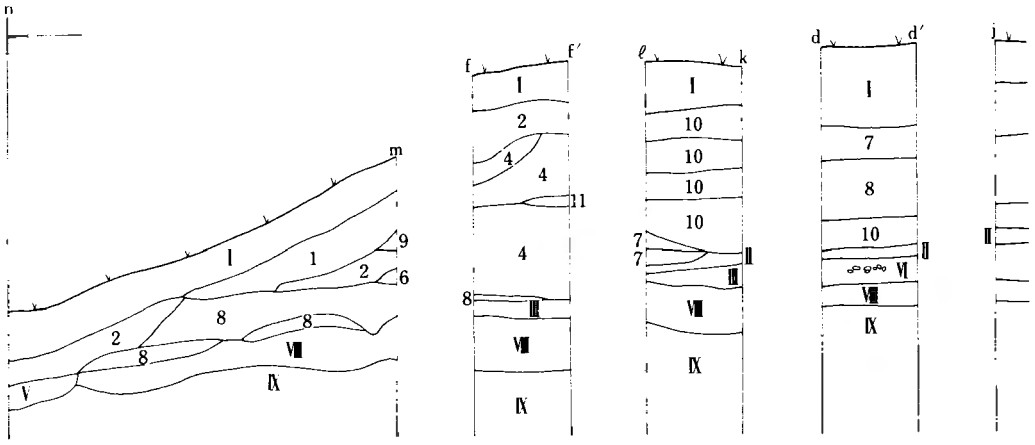
△ 第3図　新山古墳群
第1号墳の墳丘実測図

▷ 第4図　新山古墳群
第1号墳の全景

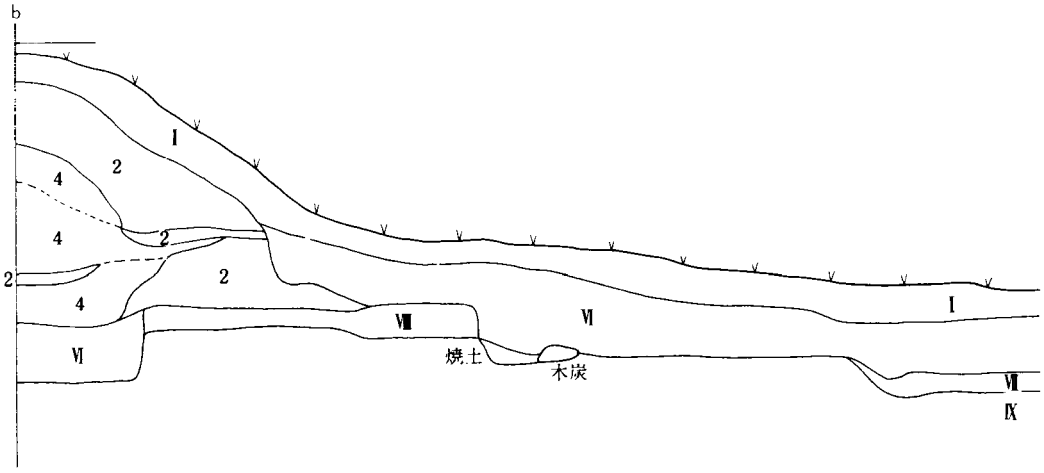


▷ 第5図　新山古墳群
第1号墳の主体部実測図

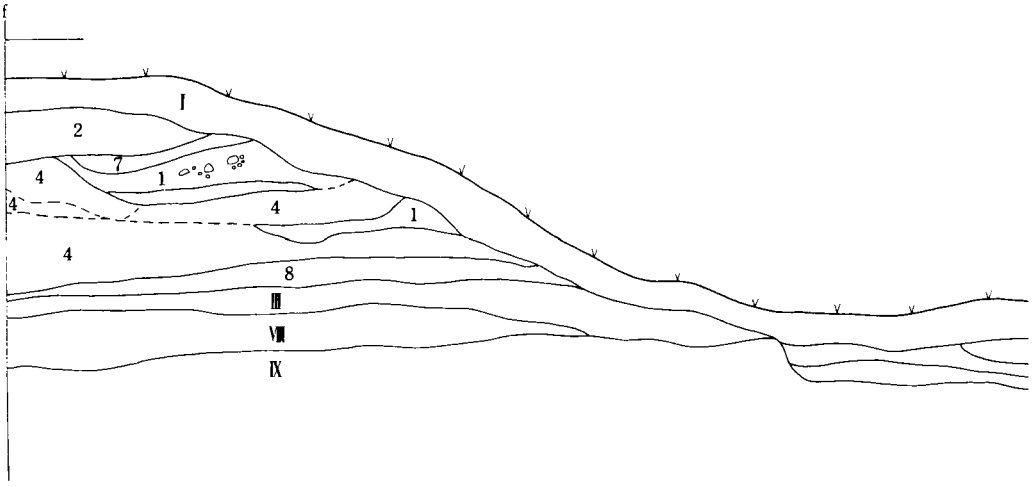
A、Ⅶトレンチ南壁、Ⅷトレンチ北壁およびⅠ～Ⅵトレンチ南壁断面図



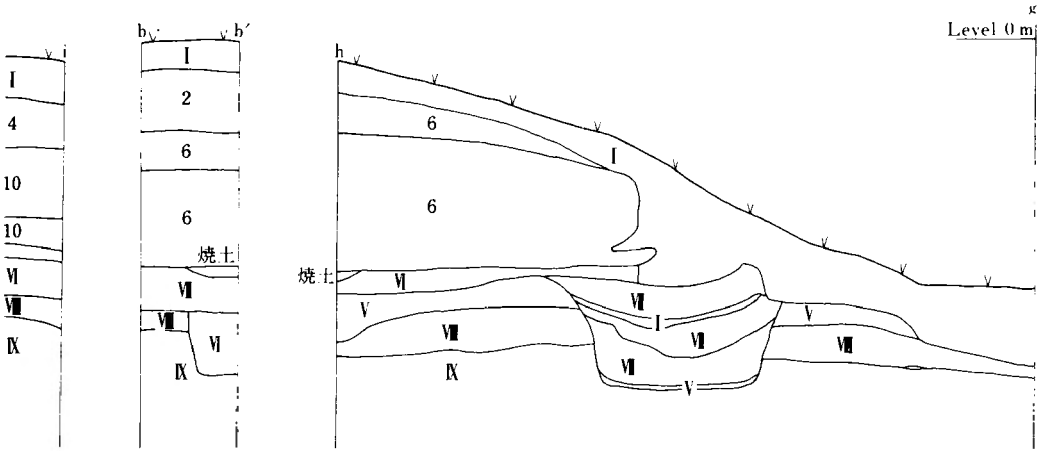
B、Ⅰトレンチ西壁断面図（a—b）

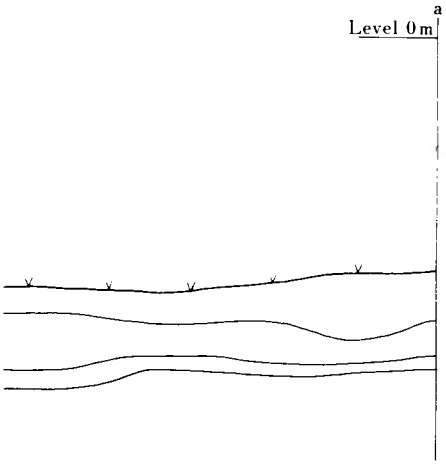


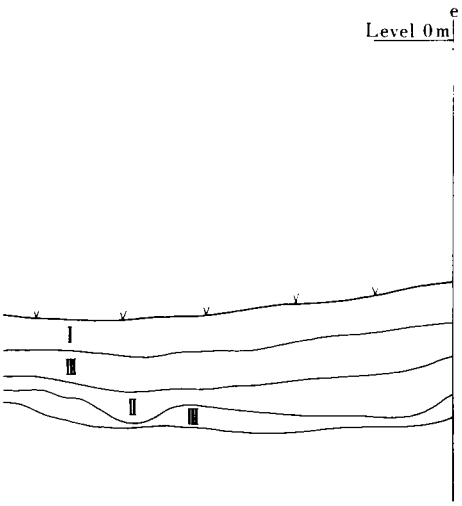
C、Ⅵトレンチ西壁断面図（e～f）



第6図　新山古墳群第1号墳のトレンチ断面図（A～C）







〈凡　例〉

● 自然堆積層

Ⅰ　表土層
Ⅱ　黒色土層
Ⅲ　黒褐色土層
Ⅳ　焼土を含む褐色土層
Ⅴ　暗褐色土層
Ⅵ　茶褐色土層
Ⅶ　黄褐色土層
Ⅷ　ソフトローム層
Ⅸ　ハードローム層

● 墳丘部盛土

1．黒色土層
2．黒褐色土層
3．暗褐色土層
4．褐色土層
5．茶褐色土層
6．黄褐色土層
7．ロームブロック
8．ロームブロックを含む茶褐色土層
9．ロームブロックを含む褐色土層
10．ロームブロックを含む黄褐色土層
11．粘土層

0　5 m

(3) 主体部

Ⅰ～Ⅶトレンチによる断面的調査においては、横穴式石室などの存在やその痕跡は認められなかったので、墳頂部における平面発掘に移った。ところが、その東端において、表土下約30cmの攪乱層中より、石棺の1部と思われる緑泥片岩の扁平板状で45×55cmの長方形に整形された板石が1枚発見された。しかも、この板石を囲繞しておびただしい量の粘土塊が検出されたので、その周辺3m×3mの範囲の平面発掘をおこなった。この粘土塊は、約2m×3mの範囲に厚さ10～20cm、巾0.5×1mのコの字形に分布し、その中央部には0.9×2mの空白部を残している（第5図）。

その長方形の空白部は、その長辺をN6°Wの方向に向け、墳丘の主軸方向とほぼ一致している。その東端部の内側に、空白部の形や方向に合せて1枚の板石が置かれていた。この現象から、この遺構こそは第1号墳の主体部であり、墳頂部に竪穴式墓壙が掘られ、その中に箱形石棺が組合せられ、その周辺に大量の粘土が貼られたものと思われる。

しかし残念ながら、この中央空白部は明らかに後世の攪乱を受けており、その部分だけに砂粒状になった粘土が散乱していた。ただ、表土下約50cmの攪乱層最下部から、刀子が1口直立して発見された以外には、土砂をフルイにかけたにもかかわらず、人骨の破片や底石の残欠さえ見出せなかったのである。おそらく、石材利用のために盗掘されたものと思われるが、この板石1枚と刀子1口というわずかな遺留品によって、辛くも主体部の位置を確認することができたことは不幸中の幸といわねばならない。この東側が後円部に当ることはほぼ確実であろう。

4. 第2号墳の調査

(1) 墳丘の築成（第7・8図）

Ⅰ～Ⅲトレンチの断面的調査によると、この墳丘の構築過程はきわめて複雑な様相を呈している。各層の堆積状態をみると、まず、この台地の地山基盤（ローム層）はほぼ平担面をなしている。そして、その上に堆積している赤褐色土層（又は黒褐色土層）および黒色土層までは、ほぼ水平であり、その土質も均質で堅くしまっているので、ほぼ自然堆積であることがわかる。ところが、それより上層においては、多種多様な土質の層が幾重にも入り組みながら堆積しており、その流れも丘状部の中心に向ってやや傾斜している傾向がある。しかも、それらは軟弱であまり締りがないので、人為的な盛り土であることは明白である（第9図）。

すなわち、そのローム基盤の近くに帯状に堆積している厚さ10cm前後の薄い黒色土層こそは、この第2号墳が構築された当時の地表面であり、それより上層の複雑な堆積状態を示しているのが、墳丘のための盛土である。しかも、この前方部においても後円部においても、常に墳丘の縁辺部から盛土がおこなわれ、その内側の盛土と互層をなしながらも比較的厚めに土砂を載せ、その層を常に内側に向って傾斜させているのは、墳丘縁辺部の崩壊を防ぐために考察された工法であろう。

なお、この複雑なレンズ状堆積を示す各層やブロックの土質を細かく分析すると、黒色土層、褐色土層、暗褐色土層およびローム層という。古墳周辺の当時の自然堆積層の各層の土層の、その組合せや配合率の違いによって千変万化しているにすぎない。ただ、比較的ロームを多く含んだ層とロームをほとんど含まない層とが、交互に版築状に積み上げられた傾向がある。これも墳丘の崩壊を防止するための工夫であったと思われる。

(2) 墳裾と周溝

この墳裾部分も、第1号墳と同じく旧地表面から切り落し、その底部はローム層を80～120cmほど掘り込み、それによって墳形の縁どりがされている。しかし、その掘り込みの巾は不定で、むしろ周辺一帯に拡がっているので、周溝とはいえない。やはり、周辺部の旧表土からローム基盤までの土砂を削り、それをかき集めて積み上げた一種の「掻上げ古墳」に属するものと思われる。その周辺部においては、古墳築成後に堆積したと思われる黒色土層と現地表（攪乱層）の下は、いきなりローム層になっているのである。

なお、墳裾部にⅣ～Ⅶの補助的なトレンチを設けることによって、この古墳が長軸約20m、後円部直径12m、前方部の巾7m、長さ10mの前方後円墳であることが確認された。主軸の方向はN40°Eを示し、北東の後円部の方が南西の前方部より少くとも175cmほど高い。しかし、かなり後世の削平があるので、この形態だけで直ちにその所属時期を推定するのは危険であろう。

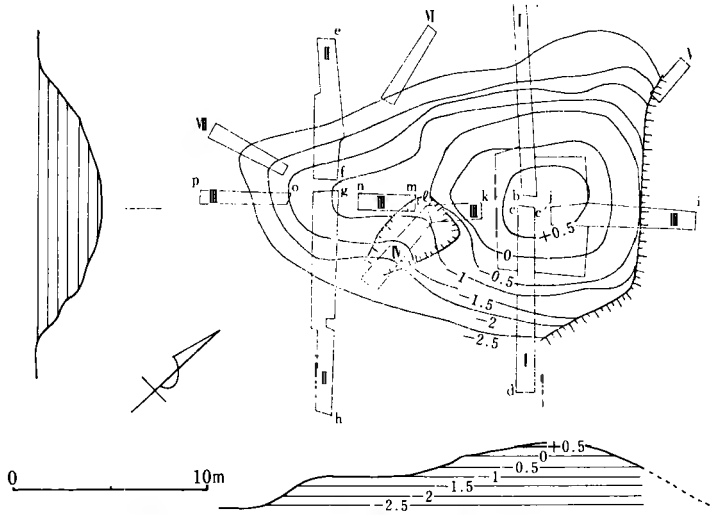
(3) 主体部

Ⅰ～Ⅶトレンチの断面的調査によっては、横穴式石室などの主体部は発見されなかったので、この古墳の形態から、墳頂部にある可能性も予側して、後円部の墳頂部に5×8 mの調査区を設定。さきに調査したⅠおよびⅢトレンチの断面をみながら慎重に削いでいった。しかし、この墳頂部には、すでに巾2 m、長さ10 m、深さ50cmほどの攪乱のあとがあったが、粘土槨や木口粘土などの存在した痕跡は認められなかった。

また、前方部と後円部のくびれ部東側面にも、すでに大きくえぐり取られた場所がある。巾3 m長さ4.5 m、深さはローム下50cmという、その攪乱の規模から考えて、元来そこに主体部があって、第1号墳と同じく盗掘された可能性が充分にある。そこで、この部分の徹底的な精査をおこなったが、横穴式石室にしろ、竪穴式墓壙にしろ、その痕跡は全く認められなかった。したがって、この古墳の主体部の位置は全く確認できなかったのである。

5. 第3号墳の調査

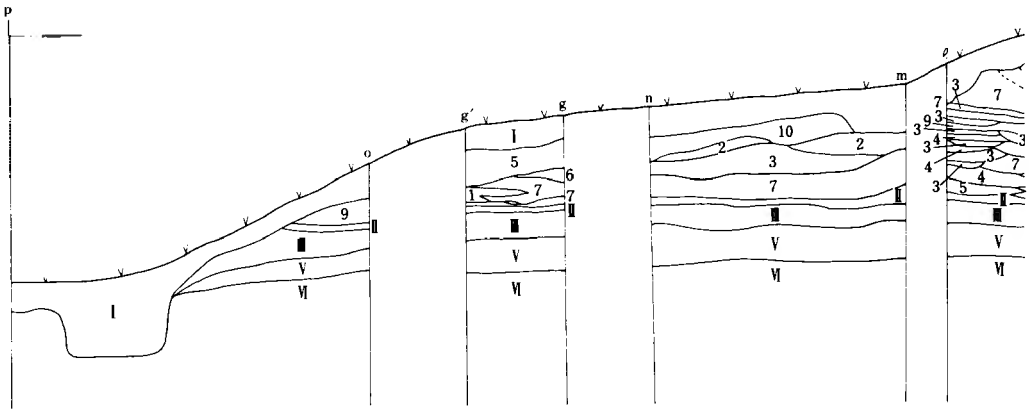
当初より、この古墳の存在については、その痕跡すら認められなかったので、その調査方法に苦慮したが、鉄棒による細心のボーリング調査によっても、トレンチの設定による断面調査によっても、この地点においては、かつて組合式箱形石棺を埋納されていた可能性はなんら見出されなかった。その堆積層は、第1号墳および第2号墳の周辺部と同様に、すでに旧地表面および褐色土層を失っており、現地表面（攪乱層）の下がいきなりローム層になっており、その上面は比較的水平であった。このローム層をさらに穿鑿して、墓壙状のものが設置された形跡は全く認められない。



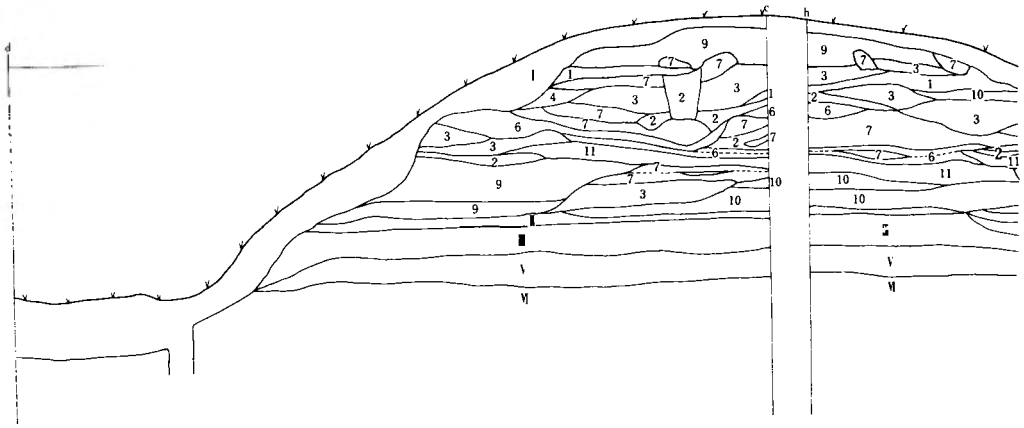
▷ 第7図 新山古墳群 第2号墳の墳丘実測図

▷ 第8図 新山古墳群 第2号墳の全景

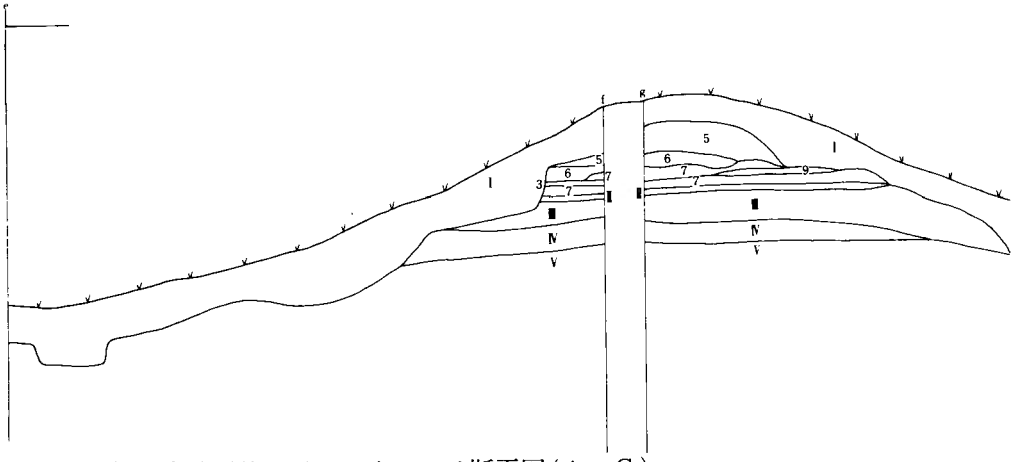
A、Ⅲトルンチ西壁断面図（i－j, c′－c, k－l, m－n, g－g′, o－p）



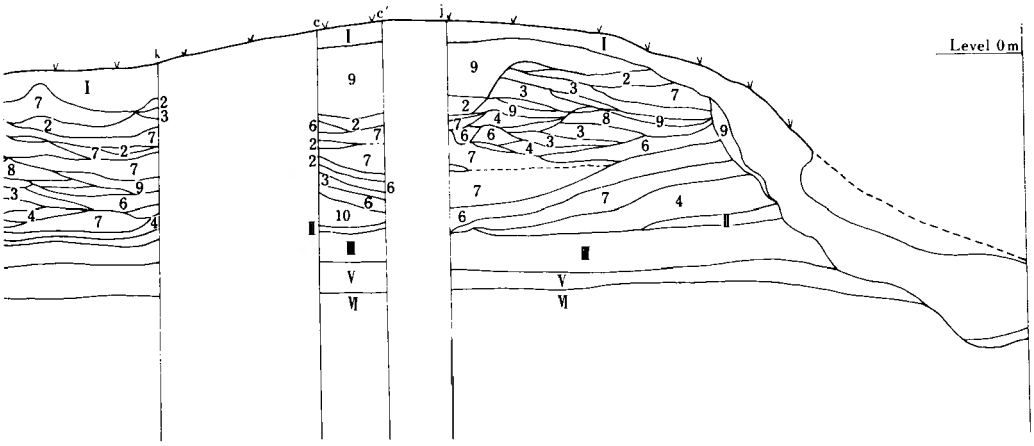
B、Ⅰトレンチ南壁断面図（a－b, c－d）

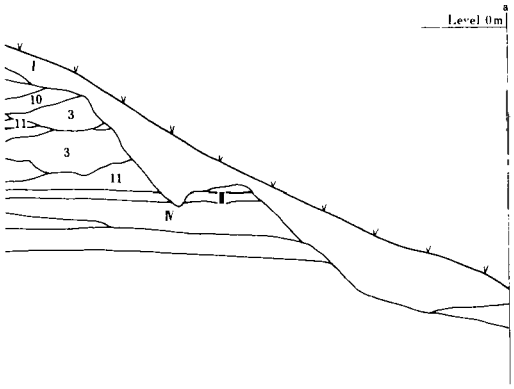


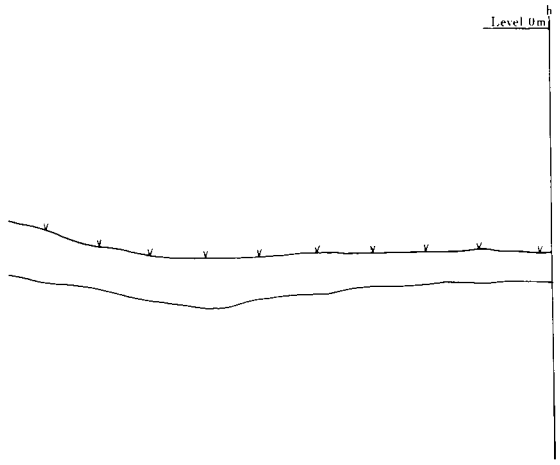
C、Ⅱトレンチ北壁断面図（e－f, g－h）



第9図　新山古墳群第2号墳のトレンチ断面図（A～C）







〈凡　例〉

●自然堆積層

Ⅰ　表土層
Ⅱ　黒色土層
Ⅲ　焼土を含む黒褐色土層
Ⅳ　暗褐色土層
Ⅴ　ソフトローム
Ⅵ　ハード　ローム

●墳丘部盛土

1．黒色土層
2．黒褐色土層
3．暗褐色土層
4．褐色土層
5．茶褐色土層
6．黄褐色土層
7．ロームブロック
8．ローム粒を含む黒褐色土層
9．ローム粒を含む暗褐色土層
10．ローム粒を含む褐色土層
11．ローム粒を含む黄褐色土層

0　5m

そこで、再び田野氏に確認を求めたところ、実は祖父や父親の話を少年の頃に聞いただけで、今にして記憶は定かではない。石棺の出土地点は、あるいは第1号墳の墳頂部であったようでもあり、第2号墳のくびれ部であったかも知れないという。また、武田宗久教諭にも質したところ、教諭も田野氏の記憶に基づいただけであるという。ただ、この古墳群内から組合式箱形石棺が発見された以上、従来の常識では、前方後円墳から出土するはずがないから、それ以外にもう1基別の古墳があったに違いないという先入観があっらしい。

いずれにしても、この第3号墳の存在は不確実であり、台地の全面発掘を実施しないかぎり確定はできない。しかし、現に第1号墳より石棺の一部が発見され、組合式箱形石棺の存在が確認された以上、しかも、それ以外の場所ではその痕跡さえ見出されない以上、田野氏宅の庭石は、第1号墳の主体部であった可能性の方がはるかに大きい。たとえ、それが第2号墳のものであったとしても、第3号墳なるものは、もともと存在しなかったことになるのである。

Ⅳ 総　括

以上のように、新山古墳群としてその所在が確認されたのは、第1号墳および第2号墳の2基だけであり、ともに前方後円墳であった。

それも、主体部が確認されたのは第1号墳のみであり、墳頂部に竪穴式墓壙を穿ち、その中に埋納された組合式箱形石棺で、副葬品の残留は刀子1本だけであった。しかし、前方後円墳に竪穴式墓壙内の組合式石棺を伴うのは、いまだかつてその類例がない。至って変則的であると同時に、局地的な現象として、地方史研究では極めて重要な資料である。その築成時期については、墳丘過半の崩壊により、確実な形態が捉えがたく、主体部の攪乱による副葬品の消失により不確実であるが、竪穴式墓壙内箱形石棺の存在と、その埋葬形態の変則性によって、返えってこれが古墳時代の後期に属することを示唆している。

第2号墳からは、ついに主体部は発見されなかったが、その規模や形態から、その類似性を近隣地域に求めるならば、平山町の中原古墳群中の3基の前方後円墳と比較できそうである。ただ、前方部と後円部との比高が問題となるが、この古墳の前方部における削平も考えられそので、現状の形態だけでは判定できない。とすれば、中原古墳群の例から、主体部は前方部と後円部のくびれ部にあったにしろ、墳頂部にあったにしろ、第2号墳が古墳時代の後期に属する可能性が充分ある。

いずれにしても、第1号墳も第2号墳も、その墳丘築成の方法が、ともに周辺の表土の掻き上げであり、周溝をもたないという点で共通している。ただ、両者の主軸の方向が極端に違っている点が問題となるが、中原古墳群にもその例があるので相互間に多少の時間的ずれがあるものの、共に古墳時代の後期に属するものと考えるべきであろう。

しかし、東京湾沿岸に近い都川河口部周辺においては、いまのところ前方後円墳のみの古墳群は他に発見されておらず、その点、きわめて特異な現象として注目すべきである。今後、千葉市内の古墳群の研究により、小円墳群や墳丘を伴わない竪穴式墓壙内組合式箱形石棺などとの有機的関連性を把握し、この古墳群の性格や意義づけをしてゆくべきであろう。

（千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員）

〔脚註〕

1. 現在もなお、田野敏夫宅の中庭に敷かれている。元来4枚ほどあったが、完形の最大のもの1枚は、加曽利中学校に寄贈され、玄関先の池の囲石として使われている。残る3枚は一部が欠損して不整形。いずれも縁泥片岩。
2. 武田宗久「古墳時代」『千葉市誌』千葉市編 昭28.
3. 中村恵次・市毛勲「千葉市中原古墳群調査報告」『古代』37号、早稲田大学考古学会、昭36
4. 武田宗久「千葉市今井町狐塚古墳」『千葉県遺跡調査報告書』千葉県教育委員会　昭40
5. 中村恵次「千葉県山武郡土気町舟塚古墳の調査」『古代』48号　早稲田大学考古学会　昭42
6. 東京帝室博物館「下総国千葉郡椎名村大字椎名崎出土埴輪男子腰部以下」『日本埴輪図集上』東京帝室博物館　大8.